

歴史回廊

第10部・畿島の文化②

舞楽「抜頭」は、天平八(七三〇)年に来日した林邑(ベトナム)僧仏西(フシ)によって伝えられた。だが、この舞はもともと林邑の舞ではない。前回紹介した「蘭陵王」と同じく、西域伝来の散楽として、中国唐代の文楽に見える。ならば、仏西はここで「抜頭」と出会ったのだろうか。

■ベトナム僧伝える

そもそも仏西は、舞楽の伝道者として直接日本にやってきましたわけではない。彼は初め、貧しい衆生を救うため、竜王の如意珠を奪取しようと海上へ小舟を漕ぎ出したものの、逆に竜王にたまされて難破。その時、文殊菩薩をなすねて海路中国へ向かっていた南インドの高僧菩提と出会い、共に五台山(山西省)へ赴く。そこで、さる翁に文殊が日本にいると知らされ、帰国する

遣唐使に同行して来日したのである。この時、「抜頭」などの舞楽が、林邑の音楽とともに日本に伝えられたと史書は伝える。

唐代、散楽は宮中ばかりでなく民間においても盛んに舞われた。仏教寺院には、朝廷から薬師の下賜があったともいう。仏西は、菩提とともに中国各地を経由した後に来日した。とすると彼は、旅の途中立ち寄った町、あるいは寺院で「抜頭」などの舞を目にし、これを習い覚えたのではないだろうか。なお、仏西は来日後、雅楽の教師となり、東大寺の大仏眼法要にも参与した。

■虎への敵討ちの舞

「抜頭」は、親を殺した虎への敵討ちをかたどった西域異民族の舞だといふ。この舞は、思いがけなくも、衆生救済という初志のかわなかつた林邑の僧によって、中国大陸経由で、東海の島にもたらされた。

思えば、人間の歴史は、大きな必然と、無数の小さな偶然とから織り成されるものなのではないか。数々の偶然が

道きた頭の抜 来渡重ねの偶然の数々



畿島神社の地久祭で奉納される「抜頭」

連なつた末にわが国に渡来した舞楽「抜頭」は、今も畿島の宮司家に「子相伝」で継承され、年一度一月五日の地久祭にて奉納される。(柳川順子・県立広島大准教授)

土曜日に掲載します